

# 週刊新潮

6月2日号  
400円



21

9・7年もあるのです」  
 そのうえ、不健康寿命は今後も、着実に延びそうに見えるしだという。  
 「一番問題なのは、団塊の世代というマス集団が、75歳以上の後期高齢者に移ったときです。75歳を超えると、心身の健康度が下がって、いろんな病気のリスクが高まり、とりわけ認知症のリスクは非常に高くなります。今はまだ前期高齢者と後期高齢者ともに約1700万人で、1対1の割合ですが、2025年にはそれがほぼ1対2に、つまり後期高齢者が前期の2倍になるのです」(同)  
 では後期高齢者の不健康寿命は、どうやって延ばさされているのか。その象徴が胃腸である。それは自分で食事ができなくなった患者の腹部に小さな入口を設け、カテーテルから栄養を流すもので、2011年時点で、胃腸を設けている存命の患者は約26万人。その9割が65歳以上だという。  
 鈴木所長の話が続く。

こうして寝たきりで、何も認識できないまま100歳まで生きながらえることを望む人が、はたしてどれだけいるだろうか。しかも、不健康寿命を延ばすために

## どの国も経験がない事態

「欧米で胃腸をつくるのは、回復する見込みがある患者だけです。たとえば胃がんの手術後、一時的に食べら

は、膨大なコストが生じるのである。臨床医の里見清一氏が指摘する。「コストをかけて胃腸をつくり延命することが、患者

「80歳、90歳をすぎて認知症の症状が進むと、家族の顔もまったくわからなくなり、ついには食べ物を食べ物と認識することさえできず、自分では食べられなくなり、自分で死んでくださいます。しかし今の医療では、そこで死んでくださいます。家族の要望もあって胃腸をつくりたい。結果、寝たきりで床ずれができ、ひどい場合は骨が露出し、とても痛々しい姿で亡くなっていく方も少なくありません」  
 ちなみに、欧米にはこうした寝たきりの高齢者はいないのだという。  
 「欧米で胃腸をつくるのは、回復する見込みがある患者の手術後、一時的に食べら

れなくなると胃腸をつくることはありますが、治ってきたら必ず抜く。あくまでも救急措置なのです」  
 と、鈴木所長。国際医療福祉大学大学院の高橋泰教授も言う。  
 「高齢者への胃腸は年上を敬う文化がある儒教国に多く、欧米では食べられなくなると寿命だという考え方は、世界最先端の高齢者ケア・マニュアルを翻訳した際、そこにオムツや介護という言葉はありませんでした。その後、アメリカに留学したとき、リハビリテーション病棟の先生と話し、欧米の先進的な介護施設ではやっていないのだから、あえて書く必要もない」とわかったのです」



短期集中連載  
**医学の勝利が国家を亡ぼす**  
 第4回

都立墨東病院  
 Metropolitan Bokutoh Hospital  
 東京ER・墨東  
 Tokyo Emergency Room - Bokutoh  
 救急入口 新棟1階

# 人類が初めて遭遇する「100歳社会」の悪夢

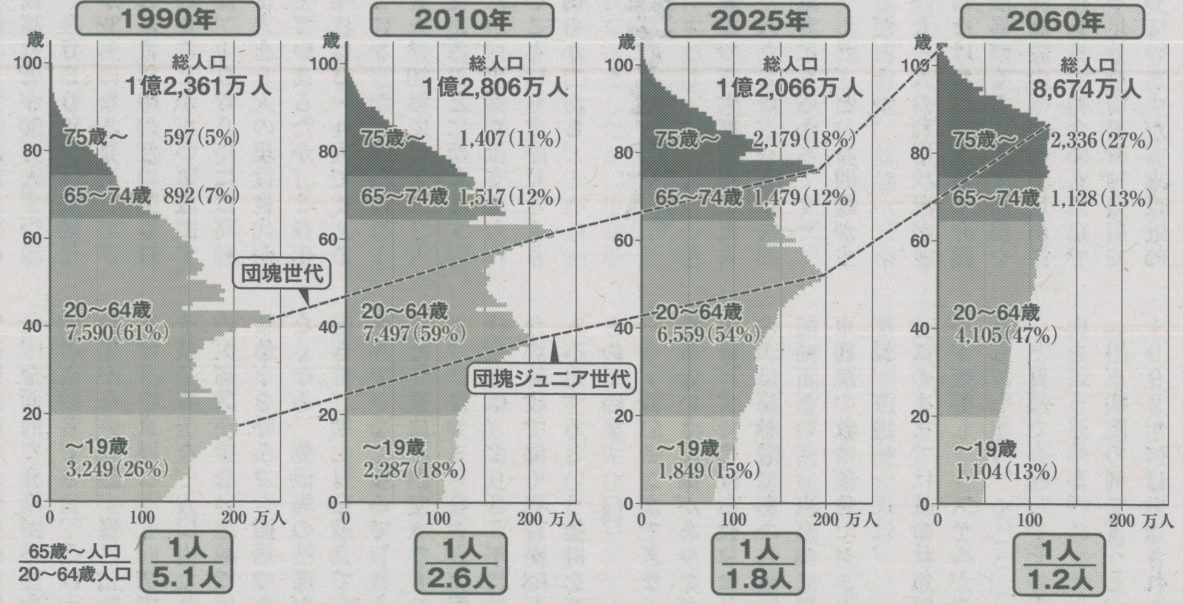
前編

無理に生かされての100歳であるとしたら……(中央は胃腸)

「人生100年生きていくことが当たり前になる未来に、もはや戦後のやり方は通用しない」  
 小泉進次郎代議士らは4月13日、「2020年以降の経済財政構想小委員会」でこう提言し、高齢者にかたよる社会保障を見直す必要性を訴えた。  
 この発言がはらむ、われわれに否応なく突きつけられる問題については、追って仔細に検証したい。しかし、そもそも、「人生100年生きていくことが当たり前になる未来」は本当に訪れるのか、それははたして幸福な未来なのか。  
 厚生労働省の調査によれば、100歳以上の高齢者の数は、2015年9月の時点で6万1568人。50年前の1965年には198人にすぎなかったが、98年に1万人、2007年に3万人、12年に5万人を突破し、昨年6万人を超えた。そして将来は、国際長寿センターの推計では、20年に12万8000人、30年に27

万3000人、40年に42万人、そして50年には68万3000人と、倍々ゲームの勢いで増えていくと見られているのだ。文字通り、100歳が「当たり前になる未来」である。  
 そう聞けば、自分もあわよくばと期待するムキも多いだらう。メディアも「文藝春秋」6月号が「百歳まで生きる」という特集を組んだのをはじめ、「100歳社会」を無条件に礼賛している。むしろ、健康体で100を迎えることができたら、幸福と言って差しつかえなからうが、実態を知られば、いったいどれだけの人が、100歳まで生きたいと願うだろうか。  
 日本人の平均寿命は2014年の値で男性が80・5歳、女性が86・83歳。周知のとおり、女性は世界一の長寿である。しかも、「団塊の世代が65歳以上の前期高齢者に突入しましたが、彼らは健康度が非常に高いので、平均寿命はあと10年くらいは延びると思われれます」  
 と、桜美林大学老年学総合研究所の鈴木隆雄所長は語る。平均寿命自体がかきりなく100歳に近づきつつあるが、鈴木所長は「しかし」と言って続けるのだ。「日本人の長い平均寿命の最後の2、3年は、寝たきりを含む虚弱な方が延ばしているにすぎません。寝たきりにならなくても、病気を患いながら生きながらえる期間を不健康寿命と言います。それが女性で13年、男性で

## 人口ピラミッドの変化



(出所) 総務省「国勢調査」及び「人口推計」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計):出生中位・死亡中位推計」(各年10月1日現在人口)

本人にとつても社会にとつても、どういふ意義があるのでしょうか。ただ生きてく

この連載では、次世代へのツケを考える題材として、年間3500万円かかるが

患者数は約700人で、ピークは交通事故など外傷で運ばれる20代と、成人病に

また、搬送される高齢者の実状が、近未来の「100歳社会」を象徴している

「寝たきりの人が心肺停止で運ばれ、必死に応急処置をしてよくなっても寝たき

に効くかわからない、使い続けなければならぬ、患者数は多い、と医療経済的

胃腸をつくつて充分なケアと感染症管理を怠らなければ、少なくとも2年くらいは延命できますが、その

その費用は月額40万〜50万円といわれています。マスで考えると非常に巨額な費

器をつけます。機械依存、医療依存で全身チューブだらけにならざるをえませ

「救命救急センターには生かすノウハウがあり、運ばれた高齢者を延命させられ

「終末が迫っているという意味では、高齢者の病気が突発でも不測でもありませ

用になります」 延命のために胃腸をつくった患者が20万人いるとし

また高橋教授は、今後の後期高齢者の増え方に、ある特徴があると話す。

初七日でも火葬できない

万人減る一方、75歳以上の後期高齢者が50万人ずつ増え、2030年には高齢化

で後期高齢者が爆発的に増え、全面的に介護が必要な

救急車をタクシー代わりに

項目がない。だから20代でも90代でも、心肺停止なら救命救急センターに運ばれるのです」(同)

「このままでは間違いなく国がもたない」 からである。そして濱邊氏は、ある人の発言を「的を射ている」と引いた。

「75歳をすぎると人間は死に向かつて、がんも認知症も脳卒中も増える。それ